

国立国語研究所学術情報リポジトリ

ことばの波止場 vol.12

| | |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2025-09-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 国立国語研究所広報室ことばの波止場編集部会 メールアドレス: 所属: |
| URL | https://doi.org/10.15084/0002000566 |

ことばの波止場

2023 vol.12



特集 ● 国立国語研究所
● ことばを集める

大学共同利用機関法人 人間文化研究機構
国立国語研究所
National Institute for Japanese Language and Linguistics

インタビュー ●「ことば」を意識していませんか？：田窪行則
●コーパスに魅せられて：小磯花絵
エッセイ ●そのことば どこで知ったか 覚えてます？：飯間浩明
●日本語の追っかけのすすめ「いかつい」に注目して：ながさわ
研究室訪問 ●撮影は今です！：浅原正幸
書籍紹介

「ことば」について
科学的・総合的に考えることの
面白さや大切さを、
皆さんにもっと知ってもらいたい。
そういう思いから
『国語研 ことばの波止場』を
全面リニューアルしました。
ことばについて、
さまざまな話題をお伝えしていきます。
リニューアル後最初となる特集では、
私たち
国立国語研究所を紹介します。



国立国語研究所とは
日本語や社会における言語生活を科学的・総合的に研究し、その成果を広く社会に提供することを目的とした研究機関です。

略称は国語研
英語名称は National Institute for Japanese Language and Linguistics。英語の略称は NINJAL。ニンジャルと読みます。

設立
1948（昭和 23）年設立で、70 年以上の歴史があります。創立時は明治神宮聖徳記念絵画館（東京都新宿区）の一部を借用して、研究員 30 人、庶務部 5 人で業務を開始しました。



● **貴重書庫**
研究図書室の奥にある、大正時代以前の貴重な資料を保管している書庫です。いくつかの資料はウェブ上で画像を公開しています。



● **研究図書室**
日本で唯一の日本語に関する専門図書室です。日本語と外国語の図書約 16 万冊、雑誌約 6,000 種を所蔵しています。



● **研究資料室**
『日本言語地図』作成時の原カードや言語調査の調査票・収録音源、コーパス作成時の書籍や雑誌の原本、音声実験に用いた装置などを保存しています。



所在地
東京都立川市。東京都千代田区一ツ橋、北区西が丘を経て、2005 年に移転しました。

施設
地上 4 階・地下 1 階建て

職員数 2022 年 4 月 1 日現在
160 人（所長 1、教授 13、准教授 10、助教 3、事務・技術職員 30、非常勤職員 103）

特集 国立国語研究所



国語研のロゴマーク
言語の「言」の文字を使い、しなやかでみずみずしい言葉の「葉」がさわやかな風にそよいでいる様子を図案化したものです。

1948年

国立国語研究所 誕生

日本では明治以来、「国語国字問題」が議論されており、第二次世界大戦が1945年に終結すると、国語に関する研究機関の早期設置を望む声がさらに高まりました。それを受けて、1948年12月20日に「国立国語研究所設置法」が公布・施行されました。第一条には「国語及び国民の言語生活に関する科学的調査研究を行い、あわせて国語の合理化的な基礎を築くために、国立国語研究所を設置する」とあります。



明治神宮聖徳記念絵画館の一部を借用して業務を開始

1951年

月刊雑誌『言語生活』創刊

当時、大学の国語学の研究室では、現代の話し言葉や書き言葉はほとんど研究されていませんでした。国語研では、「言語生活」というキーワードを掲げ、その時々での生活の中で用いられる言葉の姿や働きの研究に取り組みました。



言語生活研究の成果を広く発信し議論を深めるため、国語研が監修する月刊雑誌を筑摩書房から発行。1988年の休刊まで436号が発行された。

1966年

『日本言語地図』全6集刊行（～1974年）

言語地図は、ものの名前や生活の中で使う言葉について、各地の方言での形や発音を調べて地図上に示したもので、地理的分布に基づいて言葉の変化や体系を分析するための基礎資料となります。『日本言語地図』は言語地理学的手法に基づいて作成された初めての全国的な言語地図です。



言語地図を作成している様子。言葉の形を記号で表したゴム印を白地図に手作業で押していく。1989～2006年に刊行した『方言文法全国地図』（全6集）の第5集から、地図作成にコンピュータを導入した。

1970年

『電子計算機による新聞の語彙調査』刊行

新聞3紙を対象とした語彙調査のデータ処理には、1966年に導入された大型電子計算機を用いました。大型電子計算機はまだ理工系の研究所でも珍しく、また大型電子計算機で大量の漢字情報を処理するという課題に取り組み、成果を出したのは国語研が世界で最初です。



1966年に導入された大型電子計算機HITAC 3010

2001年

独立行政法人となる

文化庁の所轄機関から独立行政法人に移行すると同時に、英語名称を「National Language Research Institute」から「National Institute for Japanese Language」に変更しました。

2002年

漢字情報処理のための調査研究

国の電子政府推進の一環である「汎用電子情報交換環境整備プログラム」（2002～08年）において戸籍や住民基本台帳で使われている漢字を調査し、コンピュータで漢字を扱うためのJIS規格の文字コード情報などを付与した漢字情報データベースを構築しました。



漢字情報データベースには異体字も多数収録されている。図は「辺」の異体字の例。

2003年

外来語言い換え提案（～2006年）

外来語の実態調査をもとに、公共性の高い場で使われている分かりにくい外来語を解説し、その言い換え案を提案しました。

2004年

「日本語話し言葉コーパス」公開

質・量ともに世界最高水準の話し言葉のデータベースで、情報通信研究機構（旧・通信総合研究所）および東京工業大学と共同開発しました。



収録された音声の書き起こしと分析を行っている様子

コーパスとは

実際に使われた言葉を大量かつ体系的に収集し、研究用の情報を付与してさまざまな検索ができるようにした、言葉のデータベースです。国語研は日本におけるコーパス構築の先駆的役割を果たし、現在、10種類以上の多様なコーパスを構築しています。言語学以外のさまざまな分野の研究や産業界でも利用されています。

2009年

大学共同利用機関となる

人間文化研究機構の設置する大学共同利用機関となりました。英語名称に「言語学」を意味する「Linguistics」を追加して「National Institute for Japanese Language and Linguistics」に変更しました。

ウェブサイト「少納言」では、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」のデータを検索できる。



2011年

「現代日本語書き言葉均衡コーパス」を公開

現代日本語の書き言葉の全体像を把握するために、書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって1億430万語のデータを格納しています。現在、日本語について入手可能な唯一の均衡コーパスです。

1949年

共通語化調査を開始

方言の実態や共通語化の進行に関する調査を、伊豆諸島八丈島を皮切りに、福島県白河市、山形県鶴岡市、北海道で順次開始しました。中でも鶴岡調査は統計数理研究所と連携して定期的に行っており、ほぼ20年ごとに第4回まで実施しています。



八丈島での調査の様子

1953年

『現代語の語彙調査：婦人雑誌の用語』刊行

女性向けの雑誌2誌から延べ20万語を選んで言葉の使われ方を分析しました。標本の抽出には進んだ統計技術を用いており、語彙調査の手法の基礎を築きました。これ以降、雑誌の種類を増やした調査や、新聞、教科書、テレビ放送を対象にした調査へと続いていきます。



日常の家庭生活用語、特に衣食住に関する語彙について分析するため、女性向けの雑誌を調査対象とした。

愛知県岡崎市での敬語調査開始

岡崎市における敬語と敬語意識の調査は1972年と2008年にも行っており、55年の経過に伴う変化を科学的に分析することが可能になりました。大規模で長期にわたって繰り返し行われた調査は世界的にもまれです。



敬語調査の様子

1974年

日本語教育部設置

大学などに日本語教師を養成する課程がほとんど設けられていないことから、日本語を母語としない人を対象とした日本語教育の研究や日本語教師研修に取り組み、映像教材の開発・普及、研修プログラムの実施、ブックレットの作成などの活動を行ってきました。



日本語教育の映像教材の制作風景

2007年

病院の言葉を分かりやすくするための提案

医療関係者などと共同で、病院で使われている言葉を分かりやすく言い換えたり説明したりする具体的な工夫について提案しました。



市販書籍としても刊行

2009年

消滅危機言語・方言の調査研究の開始

日本各地の方言が消滅の危機に瀕していることから、それらの記録を作成し、言語の特徴を分析するとともに、各地の継承活動の支援を行っています。



「危機的な状況にある言語・方言サミット（奄美大会）・与論」の様子（2016年）

2015年

国際出版シリーズ刊行開始

研究成果を国際的に発信するため、言語学関係の出版社として世界をリードするDe Gruyter Mouton社から「Handbooks of Japanese Language and Linguistics Series」（日本語研究英文ハンドブックシリーズ）の刊行を開始しました。



全12巻を予定

誕生からの軌跡

国語研ではこんな研究をしています。

言葉の使われ方が分かるデータベースを構築し、公開しています。

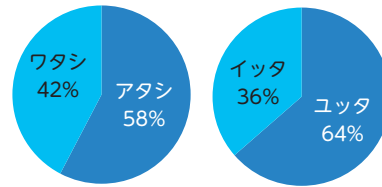
皆さんは会話の中で、「私」を「ワタシ」と話していますか？「アタシ」と話していますか？「言った」は「イッタ」と「ユッタ」のどちらですか？

国語研では、「コーパス」という言葉のデータベースの構築を進めています。コーパスの構築では、実際に使われた言葉を大量かつ体系的に集め、研究用の情報を付けていきます。地道でとても大変な作業ですが、コーパスは言葉の使われ方の分析など言語研究に欠かせないものです。国語研ではこれまでに、書き言葉、話し言葉、日常会話、方言、歴史資料の言葉、

日本語学習者の言葉などのコーパスを構築し、公開してきました。

「日本語日常会話コーパス」には、約200時間、862人の会話が集められています。そのコーパスで調べた結果、「ワタシ」より「アタシ」、「イッタ」より「ユッタ」と話していることが分かりました。

国語研ウェブサイトのコーパス検索アプリケーション「中納言」にはさまざまなコーパスが公開されていて、ユーザ登録をしていただくことでなたでも利用できます。気になる言葉の使われ方を調べてみませんか？



◀「私」と「言った」の会話中の話し方（「日本語日常会話コーパス」による）

| 中納言 コーパス検索アプリケーション | | |
|---------------------------------|--------|--|
| コーパス名 | 略称 | |
| 書き言葉 現代日本語書き言葉均衡コーパス 中納言版 | BCCWJ | |
| 書き言葉 国語研日本語ウェブコーパス 中納言版 | NWJC | |
| 話し言葉 日本語話し言葉コーパス | CSJ | |
| 話し言葉 日本語日常会話コーパス | CEJC | |
| 話し言葉 昭和話し言葉コーパス | SSC | |
| 話し言葉 名大会話コーパス | NUCC | |
| 話し言葉 東日研・職場談話コーパス | CWPC | |
| 通時 日本語歴史コーパス | CHJ | |
| 方言 日本語方言コーパス | COJADS | |
| 日本語学習者 中国語・韓国語母語の日本語学習者横断発話コーパス | C-JAS | |
| 日本語学習者 多言語母語の日本語学習者横断コーパス | I-JAS | |

▲コーパス検索アプリケーション「中納言」では、11種類のコーパスのデータを検索できる（要ユーザ登録）。

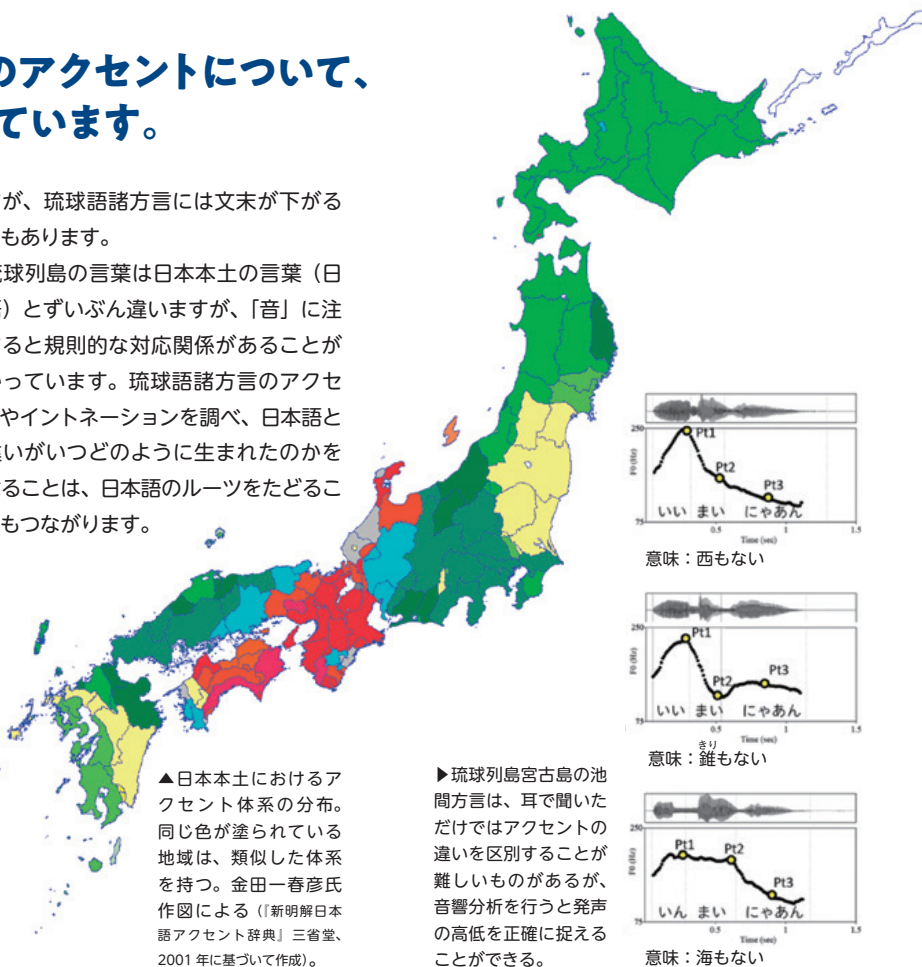
琉球列島の諸言語・諸方言のアクセントについて、音響分析も取り入れて調べています。

「雨」と「飴」はどう発音しますか？共通語では雨は「ア」を高く、飴は「メ」を高く発音します。日本語では、どこを高く発音し、どこを低く発音するかというアクセントが単語ごとに決まっています。ただしアクセントは地域ごとに異なっており、日本本土の方言についてはアクセントの分布がかなり明らかにされています。

琉球列島にも多くの方言がありますが、アクセントの研究は十分ではありません。国語研では、琉球語諸方言のアクセントの調査研究を進めています。琉球語諸方言のアクセントには聞き取りの難しいものも多く、耳で聞いただけで発音の高低を区別するのはには限界があります。そこで、録音した音声をコンピュータで音響分析してアクセントを正確に捉える手法を取り入れています。この手法は、文末の声の上がり下がりによって文の意味を表すイントネーションの研究にも役立ちます。質問をするとき、共通語では文末が上がり

ますが、琉球語諸方言には文末が下がるものもあります。

琉球列島の言葉は日本本土の言葉（日本語）とずいぶん違いますが、「音」に注目すると規則的な対応関係があることが分かっています。琉球語諸方言のアクセントやイントネーションを調べ、日本語との違いがいつどのように生まれたのかを調べることは、日本語のルーツをたどることにもつながります。



さまざまな場所を訪れ、現地の人々にお話をうかがい言葉を記録させてもらっています。

言語を研究する方法の一つにフィールドワークがあります。各地のさまざまな場所を訪れ、現地の人々に直接お話をうかがって、言葉を記録させてもらいます。許可が得られれば、録音や録画を行います。特に日常会話では、音声だけでなく視線や身振りといった身体の動作も重要な役割を果たします。そのため360度の撮影が可能なカメラを使用することもあります。

調査では、基礎的な語彙の聞き取りから始めます。「頭」「足」など体を表す言葉や「雨」「風」など天気を表す言葉など、日常の言語生活に必要で使用頻度の高い言葉について、地域の言葉で何と言うかを一つずつ聞いていきます。さらに、「雨が降っている」などの文について地域の言葉で何と言うか、聞き取りを行います。右の写真は、青森県野辺地町での調査の様子です。この地域で使われている南部方言では、「頭」は「あだま」、「雨が降っている」は「あめふてら」と言うことを教えていただきました。この方は料理の先生だったことから、郷土料理もたくさん教えていただきました。現地の人々と交流し、普段の生活の中で使われている言葉に触れることがとても大切です。

こうしたフィールドワークで得られた貴重なデータを研究者たちで共有するため、また地域の人々が閲覧できるように、調査データのアーカイブ化を進めています。



▼青森県野辺地町での調査の様子

世界のさまざまな言語と比べると、日本語の特徴や起源が見えてきます。

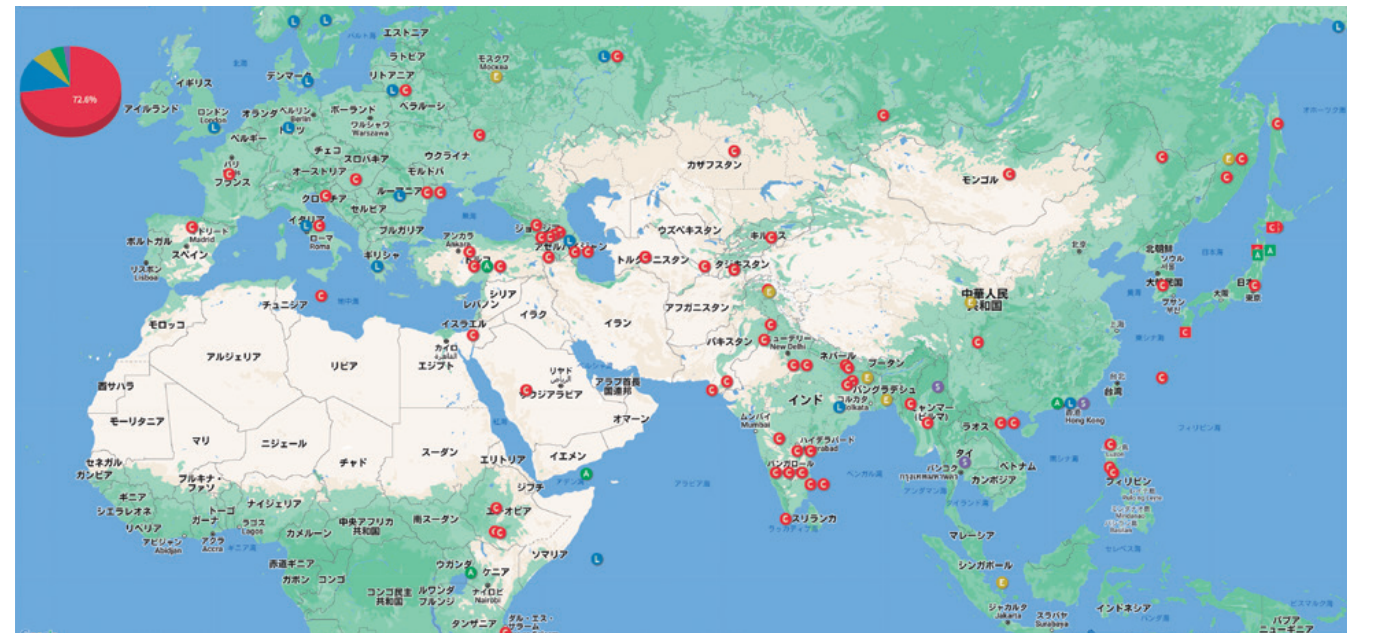
「国語研では日本語の研究だけをしているのですか？」と聞かれることがあります。実は、国語研では世界のさまざまな言語を研究しています。さまざまな言語と日本語を比較対照して類似点や相違点を分析することで、日本語という言語の性質について理解を深めることができます。そのために、さまざまな言語の研究者と国際的な共同研究を行っています。

例えば、ペアとなっている自動詞と他動詞の関係について研究してきました。日本語には「沸く／沸かす」のように自動詞と他動詞のペアが多数あります。

そうしたペアには一方からもう一方が生まれたものがあり、そのような動詞を「使役交替動詞」と呼びます。私たちはいろいろなペアについて、自動詞から他動詞が生まれたのか、他動詞から自動詞が生まれたのかを、言語ごとに調べています。「沸く／沸かす」については、日本語では自動詞から他動詞が生まれ、ほかの多くの言語も同じであることが分かりました（地図中の赤色）。

このように世界のさまざまな言語を比べることで、人間言語の特徴の理解にもつながります。

▼「沸く／沸かす」の派生関係を表した使役交替言語地図。赤色は自動詞「沸く」から他動詞「沸かす」が派生、緑色は他動詞から自動詞が派生、黄色は両方向の派生が見られる両極型、青色は自動詞と他動詞が同じ、紫色は別の語彙を用いて表現する言語を示す。使役交替言語地図のウェブサイトでは約30のペアについてのデータを見ることができ。



海外の日本語学習者は、どのように日本語を習得しているのかを調査しています。

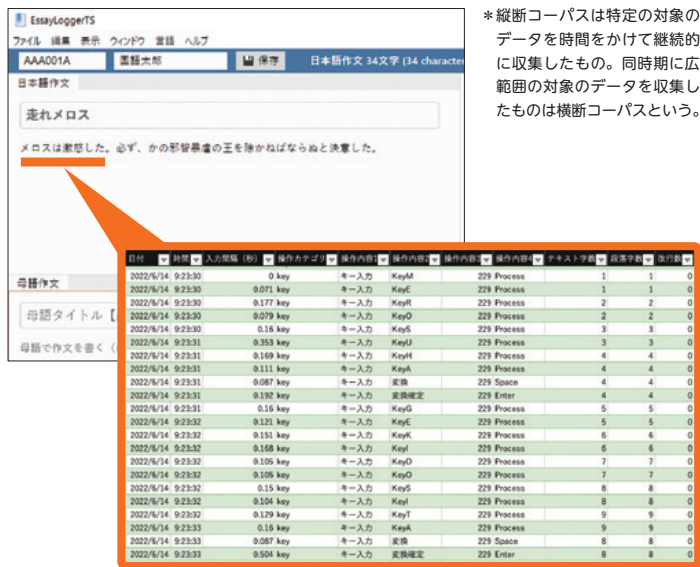
海外での日本語学習者はおよそ 380 万人と言われ、アジアを中心に増加しています。国語研では、海外の日本語学習者がどのようにして日本語を習得しているのかを調査しています。

調査は、日本の大学院への進学や日系企業への就職も多い中国・台湾・ベトナム・韓国・タイなどの大学生約600名（当初）を対象に、入学から卒業までの4年間にわたって行います。対象者には、国語研が開発した「EssayLoggerTS」というソフトウェアを使って作文を書いてもらいます。日本語学習者の作文の分析研究はこれまでも行われていますが、書かれた作文についてしか分析できませんでした。皆さんも作文を書くとき、意図が伝わる表現になるように何度も書き直すでしょう。このソフトウェアを使うと、どの部分から書き始めるのか、どのように書き直しているのか、どの部分に時間がかかったのかなどが記録されます。それを分析することで、日本語学習者にとって作文を書くときにどのような点が難しいのか、また継続的に調べることでどのように作文能力が発達していくのかが分かります。

そのようにして4年間かけて収集した約5,400本の作文から成る作文縦断コーパス*を構築し分析することで、日本語学習の効率的な方法の提案につなげていきます。一部の学習者には並行してインタビュー調査も実施しており、談話縦断コーパスを構築し、作文能力と談話能力の発達過程の関係を明らかにすることも目指しています。



◀ オンラインでの
作文調査の様子（ベ
トナム）。1年に3
回、4年間にわたっ
て調査を行う。



▲作文調査に使用するソフトウェア「EssayLoggerTS」の画面。日付、時間、入力した文字、修正した記録などのデータが記録される。母語で入力した作文から執筆意図を探り、日本語の誤用を分析する。

**失われつつある日本各地の
方言の記録を公開。
ふるさとの言葉を聞いてみませんか？**

日本語と一口に言っても、地域によって言葉の形や使い方が異なります。例えば朝のあいさつも地域によってさまざまな言葉が使われてきました。

しかし近年、日本各地の方言が急速に変化し失われてきたことから、伝統的な方言を記録するため、文化庁は1977～85年に「各地方言収集緊急調査」を行い、日本全国約230地点で談話や民話を収録しました。そのときの調査結果である約7,500本のカセットテープと、方言音声を文字起こしして共通語訳を付けた約2,000冊の手書き原稿が、国語研に所蔵されています。これらは伝統的な方言の実態を知ることができる貴重な資料であることからデジタル化が進められ、一部は『全国方言談話データベース 日本のふるさとことば集成』（全20巻）として2002～08年に刊行されています。しかし、大量の資料が未公開のまま残されていました。

そこで、貴重な資料をもっと活用できるように「日本語諸方言コーパス」を構築し、2020年に公開を開始しました。各地でどのような方言が使われているかを音声でも文字でも確認できて、検索は方言と共通語の両方で可能です。2022年4月現在、80時間の方言音声が収録されており、今後もデータを追加していきます。コーパス検索アプリケーション「中納言」のユーザ登録をするので、ふるさとの言葉や旅先で耳にした言葉を調べてみませんか？



▲さまざまな地域の朝のあいさつ。「日本語諸方言コーパス」で共通語「おはよう」を検索した結果の例。



◀『日本語教育映画 基礎編』第1巻のタイトル画像。基礎編は30巻から成り、初級段階で導入される文型を用いた会話を映像化している。



▲『日本語教育映像教材 初級編—日本語でだいじょうぶ』の場面の例（映像をイラスト化した）。勉強、友達、仕事、恋人というストーリーで、さまざまな場面での会話を取り上げている。

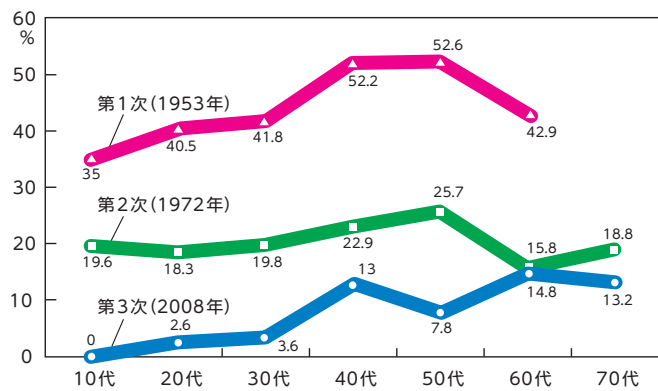
**日本語教育にいち早く取り組み、
映像教材のデータ公開も
始めました。**

国語研では、日本語・言語研究のための基礎資料やデータなどを整備し、広く社会に提供しています。学術研究や教育活動の成果や学術的資料もウェブサイト
で公開しており、その中には日本語教育関係の資料も含まれています。

国語研では、1974年から83年にかけて『日本語教育映画 基礎編』を制作しました。日本語教育のための専用映像としては最も早い時期に制作された教材です。さらに『日本語教育映像教材 中級編—伝えあうことば』（1986～89年）と『日本語教育映像教材 初級編—日本語でだいじょうぶ』（1993～95年）も制作し、映像を活用した日本語教育の指導方法の普及をワークショップなどで推進してきました。

これら3種類の映像教材のデジタル化を進め、2022年3月からデータ配布を開始しました。利用申し込みをしていただくことで、映像をご覧いただけます。あわせてシナリオ集と語彙表をテキスト化し、関連教材とともに「学術情報リポジトリ」などで公開しています。日本語教育の現場はもちろん、日本語教材の開発史、教材分析、談話分析などの研究に活用されることを期待しています。

**言葉はどう変わっていくのか？
同じ場所で繰り返し調査して
分析しています。**



▲愛知県岡崎市の敬語と敬語意識に関する調査において「家庭内の年長者等に敬語を使うべきだ」という意識を持っている人の割合の変化

言葉や言葉の使われ方は変わっていきます。国語研では、同じ場所でも同じ内容の調査を一定の間隔において調査することで、言葉の使われ方がどのように変化したのか、地域の方言がどのような過程を経て標準語化したのかななどを調査し、研究しています。

その一つが、統計数理研究所と共同で愛知県岡崎市において行っている敬語と敬語意識に関する調査です。これまでに1953年、1972年、2008年の3回実施しています。その結果を見ると、55年間で敬語と敬語意識がどのように変化したかが分かります。例えば「家庭内の年長者等に敬語を使うべきだ」という意識を持っている人の割合は、すべての年齢層で減少してきています。2008年の第3次調査では、年齢層が低いほどその割合が低くなる傾向があり、10代では0%でした。親に対して友達と同じように話す人が増えてきた、と感じている人もいるのではないのでしょうか。それが定点・経年調査のデータにはっきり表れています。

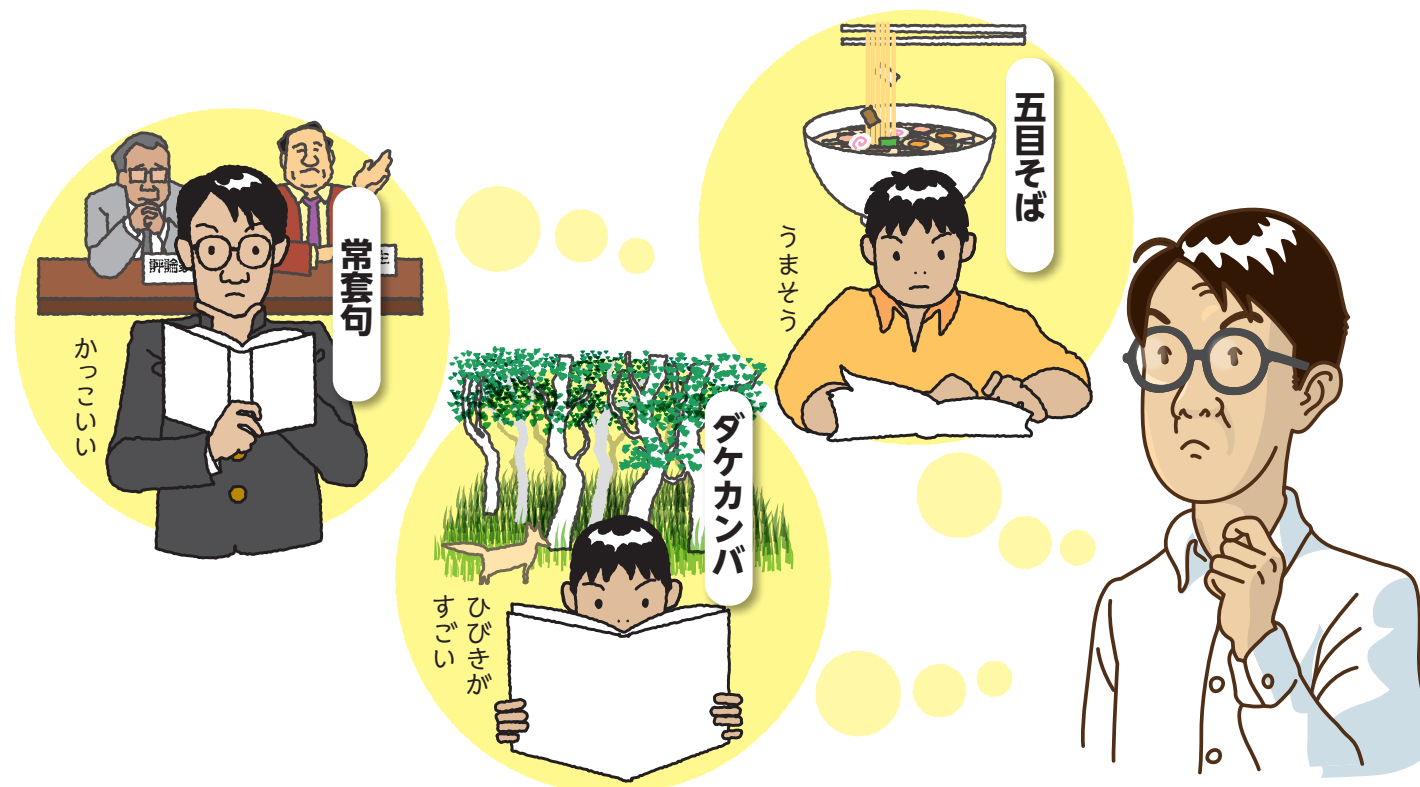
国語研では、山形県鶴岡市などでも定点・経年調査を行っています。
言語の定点・経年調査は世界的に見ても珍しく貴重です。

そのことば どこで知ったか 覚えてます？

飯間浩明



いいま・ひろあき。1967年、香川県高松市生まれ。国語辞典編纂者。『三省堂国語辞典』編集委員。著書に『日本語はこわくない』（PHP 研究所）、『日本語をもっとつかまえる！』（毎日新聞出版）、『知っておくと役立つ 街の変な日本語』（朝日新聞出版・朝日新書）、『ことばハンター』（ポプラ社・児童書）など。
ツイッター ID：@IIMA_Hiroaki



「^{じょうとう}常套句」ということばを覚えたのは中学2年生の時でした。当時の自分の文章が残ってるので、たぶん間違いありません。それまでは「よく使うことば」「ありふれたことば」などと表現していました。それを難しいことばで「常套句」と言うらしい。かっこいい。

そのすぐ後に、担任の先生が「常套手段」ということばを使うのを聞いて、それも覚えました。何かをするときに決まって使う手段のこと。「常套」の使い方がだんだん分かってきました。「もっとたくさん難しいことばを覚えたい」と思うようになり、私のことばは少年期を終えて青年期に移行しました。そのきっかけのひとつが「常套」でした。

ところで、私はどこでこの「常套句」ということばを知ったのでしょうか。たしか筒井康隆さんの小説だった気がするけれど、さて、何という小説だったか……。

私のパソコンには、書籍・雑誌などを自分でスキャンして作成したテキストデータが3,000冊分以上入っています。その中には、中学の頃に読んだ本のデータも含まれています。

データを検索してみると、筒井さんの作品には「常套句」「常套的」などの語がよく出てきます。時期から考えて、私が最初に目にしたのは『大いなる助走』（1979）にある以下の例だったかもしれません。

〈選考委員の老大家たちが、リアリティがない、文章が生硬である、観念的に過ぎるといった、あのての作品に対する常套句を振りまわして〉

私がもし「私自身のことばの辞典」^{へんさん}を編纂するとしたら、「常套句」の用例として、まずこの一節を引用することになるでしょう。私にとっては貴重な用例です。

では、もうひとつ。「^{わけ}どういう^{わけがら}訳の訳柄か」という奇妙な言い回しがあります。意味は「^{わけ}どういうわけか」ということ。私がこの「^{きま}訳柄」ということばを知ったのは、はたしてどこでだったか。北^{もりお}杜夫の小説で見たのは覚えています。でも、彼のどの作品だけ。

またしても、パソコンの中のテキストデータを検索してみます。すると、『どくとるマンボウ航海記』（1960）の中に以下の一文がありました。

〈〔登山で〕 一体どういう訳の訳柄か、必ずと
いってよいくらい尾根を間違えてしまったものである〉

このほか、『どくとるマンボウ青春記』『奇病連盟』などにも「訳柄」は出てきますが、最初に読んだのは『航海記』で、小学6年生の時だった。もやもやが晴れて、すっきりしました。

こんなふうに、私は「このことばを、自分はいつ、

どこで知ったか」に関心を持ちます。国語辞典を作る仕事を長く続けているせいでしょう。

辞書作りの作業の中で、たとえば「イマイチ」ということばがいつ現れたかを調べるとします。事例は1970年代末からあります。私自身もその頃、雑誌で初めて「イマイチ」を目にして、強い印象を受けた記憶があります。その文章は「最近人気がイマイチのレッゴー三匹」というものでした。でも、何という雑誌だったか覚えていない。その雑誌があれば、「イマイチ」のいい用例になるんだがなあ、と悔しい。いつしか、「自分が今までに覚えたことば全部に、いつ、どこで出合ったかというラベルがついていたらいいのに」などと空想するようになりました。

現在の私は、初めて目にしたことばがあれば、日付と場所（出所）の情報とともに極力メモを取ります。いわゆる「用例採集」です。仕事柄、これは習慣になっています。一方、辞書の仕事に従事する以前に出合ったことばについては、「いつ、どこで出合ったか」をほとんど覚えていないことに愕然とします。

その欠落を埋めるべく、最近の書籍だけでなく、昔読んだ本、雑誌などをパソコンのデータに加えるようになりました。もちろん、それらは過去に出合った膨大なことばたちのごく一部にすぎないのですが、たまに、「そうそう、この本にあったっけ」ということばを見つけるとうれしくなります。

「ダケカンバ（岳樺）」という樹木は、^{まつたに}松谷みよ子『コッペパンはきつねいろ』で知りました。小学1年生の時です。さまざまな具材が入ったラーメンを「五目そば」と言うことは、大石 真^{おおいし まこと}『ミス3年2組のたんじょう会』で読みました。これは小学3年生の時。まんじゅうの種類に「そばまんじゅう・くりまんじゅう・くずまんじゅう・酒まんじゅう・中華まんじゅう」などがあるのは、興津 要^{おきつ かなめ}『落語ばなし まんじゅうこわい』で覚えました。3年生か4年生だった。

こんな調子で、自分がいつ、どこで、どんなことばを覚えたかを探索していくと、自分のことばのルーツが分かって面白いものです。自分のことばを知るということは、自分自身を知ることです。

この探索を行うことが、用例採集以外にどんな実益をもたらすか、それはよく分かりません。昔読んだ本をテキストデータにしてパソコンに蓄積する作業を喜んでする人が多いとも思えません。でも、そこまでしなくても、昔好きだった本をちょっと読み返して、その当時出合ったことばに再会する、というのも悪くないものです。

あなたにも、気に入って愛用していることばがきつといくつもあるでしょう。そのことばを初めて知ったのは、いつ、どこででしたか。記憶がおぼろげにならないうちに確かめてみてはどうでしょう。思いのほか、実り多い作業になるかもしれませんよ。

「ことば」を意識してみませんか？

田窪行則 国立国語研究所 所長



——「ニホンゴ探検」が人気だそうですね。

ミニ講義やワークショップなどを通じて子供たちにことばの不思議に触れてもらおう、というイベントです。2020年からはウェブ開催でじかに接することができないのが残念ですが、子供たちの反応がとてもいいんです。質問タイムには、たくさんの手が挙がります。

いつも使っていることばですが、多くの人はことばを意識していません。意識してみると、ことばには不思議がたくさん詰まっていると気付くでしょう。すると、なぜだろうと、理由や答えを知りたくなるでしょう。このようなイベントをきっかけにして多くの人に、ことばを意識して、ことばに興味を持ってもらいたいのです。付き添いの大人の方にも楽しんでいただいています。

——田窪所長は、いつごろからことばに興味を持ったのですか。

中学生のころは建築家になろうと思っていたのですが、樺太アイヌ語の調査に行ったときのことが書かれた金田一京助の『北の人』という随筆を偶然読み、「未知のことばをフィールド調査で学ぶというのは、かっこいいな」と感じたことを覚えています。その気持ちはずっと頭の隅にありましたが、いろいろあって最近まではどちらかといえばことばの仕組みの研究をしていました。大学では最初、英語学の勉強をしようと思っていたのですが、なぜか英語より日本語について考える時間が長くなり、いつの間にかこの世界に。朝から晩まで、ことばのことばかり考えています。言語学者たちでカラオケに行くと、「これはどう発音するんだ?」「これはどこの方言だ?」と、歌うのを忘れて言語学談義になってしまいます。私はもう50年以上ことばの研究をしてきましたが、今でも不思議なこと、知らないことばかりです。

——2017年10月に所長になられ、2022年4月からは第4期中期計画が始まりました。どのようなことを目指しているのでしょうか。

第3期では、言語のデータベースに研究情報を付けた言語コーパスの種類や内容を拡充し、公開してきました。研究データを

公開し、オープンデータに基づいて研究を行うオープンサイエンスは、理学や工学では主流になっています。第4期では、フィールド調査や実験などのデータの公開を進めるとともに、人文学におけるオープンデータ、オープンサイエンスのやり方を私たちが示し、確立することを目指します。

最近では、増加する外国人労働者の日本語教育に加えて、その子供たちの日本語教育が問題になっています。家庭では両親の母語を使い、学校や社会では日本語に触れるという環境では、特別な日本語教育が必要です。日本語の習得過程を調査研究し、日本語教育の支援に生かすことも、第4期の大きな柱になっています。

——ほかの国にも、日本の国語研のような研究機関はあるのでしょうか。

言語政策のための研究機関は、いろいろな国にあります。国語研も1948年に設立されたときは、共通語の普及など言語政策のための調査研究を行うことが任務でした。現在は、言語の基礎研究が中心です。言語の基礎研究を中心に行っている研究機関は、世界でも多くありません。そこで国語研の優れた研究成果を世界に発信すべきだと考え、英文刊行物の出版を進めてきました。新しい国際出版シリーズも始め、国際的な展開を加速させていきます。

——言語学の研究をしたい人は、どのような進路を選べばいいのでしょうか。

言語学は文理融合の分野であり、数学やコンピュータサイエンスを学んでから入る道もあります。国語研では、2023年度から総合研究大学院大学に博士後期課程の日本語言語科学コースを設置する予定です。言語学以外を学んできた人も大歓迎です。コース設置の準備として、言語学の基礎を学ぶことができる動画教材「言語学レクチャーシリーズ」の試験版を制作し公開しているので、ことばに興味がある人は、ぜひご覧ください。

国語研のウェブサイトでは、「ニホンゴ探検」のミニ講義をはじめ一般向けの動画や資料も多数公開しています。皆さんも、ことばを意識してみませんか？

コーパスに魅せられて

小磯花絵 国立国語研究所 副所長



——どのようにして言語の研究をするようになったのですか。

学校の教科では国語が一番苦手で、数学が好きでした。最初に興味を持ったのは、ことばではなく、音なんです。ピアノ、バイオリン、フルート、パーカッションなど、子どものころからいろいろな楽器をやっていたことも関係しているのでしょう。

私たちが会話をする際、ことばの音声も大きな役割を果たします。例えば、「うんうん」という相づちは時に共感なども示しますし、こうしたことばのリズムが合うと、心地よく感じ話も弾みます。そういうことに興味があったので、大学では初め心理学・認知科学を勉強していました。

言語学の真ん中の道ではなく、心理学、認知科学、情報工学と変わりながら、言語学との境界領域を歩いてきました。専門は？と聞かれたら、今はコーパス言語学と答えています。

——コーパス言語学とは？

コーパスとは、ことばを大量に収集してさまざまな情報を付けて検索できるようにした、ことばのデータベースのことです。コーパスを使った言語研究をコーパス言語学と呼んでいます。どういうことばをいかに集めるか、どういう情報を付けるかというコーパス設計や構築法についての研究も対象となります。

私がコーパスと出会ったのは学生だった1990年代前半です。当時は、British National Corpusという1億語から成るイギリス英語のコーパスが完成した一方、日本語の大規模なコーパスはありませんでした。特に話しことばのコーパスは遅れていて、共有化の動きがようやく始まったところでした。コーパスは、ことばを集めるだけでなく、公開して活用できるようにすることが重要です。学生のころに日本語コーパスの構築と共有化に取り組み始め、国語研に入った今も延々と続けています。

——2021年から副所長に。最近の成果を教えてください。

2016～21年度は国語研の第3期中期計画の期間で、「多様な言語資源に基づく日本語研究」をテーマに掲げてきました。日常会話や方言、日本語学習者のことば、奈良時代から明治・大正時代までカバーするものなど、新たなコーパスを構築したり拡充して研究を進めるとともに、研究・教育・産業など社会

で広く使ってもらえるよう、こうしたコーパスを一般に公開する取り組みを行ってきました。

私は「日本語日常会話コーパス」の構築に携わりました。家族や友達との食事、仕事など、さまざまな場面における日常会話を200時間分集めたもので、映像も公開しています。うなずきや身振り手振りも会話に重要な役割を果たしていますから。この規模で映像付きの日常会話コーパスは、世界に例がない画期的なものです。手前みそながら自慢させてください。

——コーパスは言語研究だけでなく広く使うことができますか。

コーパスを社会で広く使ってもらう、というのには、2種類あります。1つ目は、コーパスを用いた研究成果が私たちの生活に還元されることです。例えば国語研で構築・公開している「日本語話し言葉コーパス」を学習データとして使った結果、音声認識の精度が飛躍的に上がったのです。コーパスは産業界からも注目されていて、生活に還元される例が増えています。

2つ目は、一般の人にもコーパスを使ってもらうことです。国語研のウェブサイト「少納言」では「現代日本語書き言葉均衡コーパス」のデータを検索できます。ぜひ、気になることばを検索してみてください。そのことばはブログではよく使われているけれども新聞では使われていない、といったことなどが分かります。インターネットの検索エンジンの結果とは違うものが見えてきて、ことばの選び方の参考にもなると思います。

——今後、どのような研究を進めていこうとお考えですか。

日常会話コーパスを拡充していきます。成人の会話を中心だったので、子どもの会話を増やしたいのです。ことばは、人の成長によっても変わりますよね。どのように変わっていくかを分析し、教育にも役立てたいと思っています。

また、コロナ禍で高齢者のコミュニケーション不足による認知機能の低下が問題になっています。そこで、高齢者の会話をコーパス化し、それに基づく研究を始めました。認知機能を活性化させる会話やことばが明らかにできれば、問題の改善に貢献できるかもしれません。コーパスは、私たちの生活に役立つ多くの可能性を秘めていると思います。

音で集める

ことばには、大きく分けて2種類あります。話しことばと、書きことばです。話しことばを集めるには、話者が発した音声（発話）を録音機器を使って記録します。場面や分析の方法、研究の目的に応じて、さまざまな機器を使い分けています。

「日本語日常会話コーパス」を構築するため、さまざまな日常場面での会話の録音に使ったICレコーダーです。会話をしている一人一人の音声を大きく明瞭に録音するため、番号を付けた個人用ICレコーダーをそれぞれ首に下げてもらいます。会話全体を録音できるように、会話者の中央にもICレコーダーを置きます。



「日本語日常会話コーパス」の収録前、録音・録画機器の充電の様子。複数台を同時に充電できる充電器が欠かせません。



話者の口とマイクの距離が変わると、音声の周波数や強度が変化してしまいます。音響分析などのために高品質の音声データが必要な場合、話者の口とマイクの距離が常に一定になるように、マイクを頭部に固定できるヘッドセット型マイクを使って録音します。



音響分析を目的とするなど高品質の音声データが必要な場合、発話の録音にリニアPCMレコーダーを使用します。アナログ信号である音声をコンピュータで分析できるようにするには、デジタル変換を行う必要があります。リニアPCMレコーダーでは、変換の際にファイルのサイズを小さくする圧縮を行わず、高音質の録音ができます。



故障などに備え、録音機器を2台使うこともあります。メインの録音機器（左）は高音質で録音できて保存・分析に向いている非圧縮形式で、サブの録音機器（右）はファイルサイズが小さくなる圧縮形式で、と録音形式を変えたりします。

国立国語研究所（国語研）は、ことばに関する研究機関です。ことばを研究するには、研究対象であることばを集める必要があります。では、どのように、ことばを集めるのでしょうか。国語研の研究者たちが使っていることばを集める道具や方法の数々を紹介します。

特集 ことばを集める

映像で集める

音声による発話だけでなく、視線や身振りといった体の動きも、コミュニケーションに重要な役割を果たしています。そのため、映像を記録することもあります。



360度カメラの映像



脳カメラ2の映像

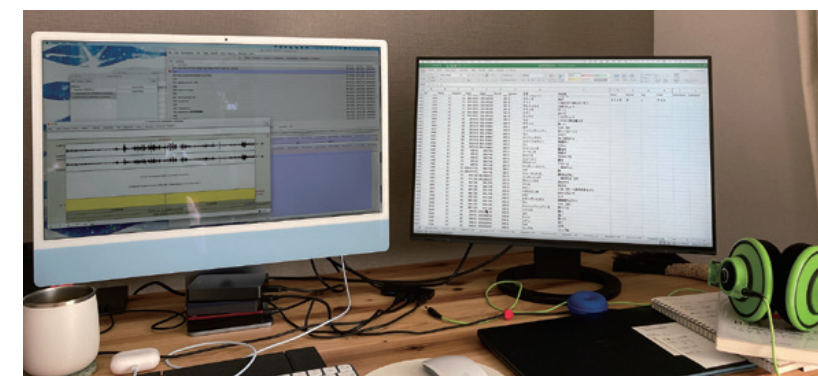


「日本語日常会話コーパス」の収録では、会話者の中心に全方位を撮影できる360度カメラ（上）を置き、会話の様子を俯瞰的に撮影できる位置に脳カメラを設置しました（右）。3枚の写真は、同僚との飲み会での会話を収録している様子です。「日本語日常会話コーパス」では、研究の可能性を広げるために映像も公開しています。映像付きの大規模日常会話コーパスは世界初の試みです。



カメラ

「日本語日常会話コーパス」には、散歩など屋外での移動時の会話も収録しています。音声は一人一人が装着した個人レコーダーで録音しますが、会話者全員の様子を撮影するのは大変です。そこで、会話の状況を把握できるように、1人がウェアラブルカメラを頭部に装着して、会話者の目線で見えているものを撮影します。



録音・録画データはすぐにパソコンに保存して、収録年月日、内容などの情報を記述します。これを忘れると、どのファイルがどのデータか分からなくなってしまいます。



数が多くなる録音・録画機器やカメラのメモリーは、色分けをしたり番号を付けたりして入れ違いがないように工夫しています。

文献・資料 を集める

国語研で研究しているのは、現在使われていることばだけではありません。かつてどのようなことばが使われていたかを研究するため、古い時代に書かれた書物や文書などの文献を収集し、整理・分析しています。ことばがどのように変化してきたかを知る手掛かりにもなります。

また、収集の対象は国内だけではなく。移民・植民によって海外に形成された日本語コミュニティを対象に、日本語で作成されたさまざまな資料を収集して、日本語のバリエーションや変化についても研究しています。

文献調査の主な携行品（高田智和教授の場合）

原稿用紙、鉛筆（黒・赤・青・緑）、ルーペ、ペンライト、巻き尺。古い文献を調査するときは、鉛筆以外の筆記用具の持ち込みが禁止されています。ペンライトは、角筆で紙の表面をへこませて書かれている文字の読み取りにも使います。



国語研が所蔵している『悉曇藏』巻一（安然 著、1297年写）を調査したときに作成した文献ノート。調査した日付・場所、文献の名称、表紙に書かれている情報、大きさ、紙質などを原稿用紙に記録していきます。右は、国語研のウェブサイトで公開しているこの文献のデジタル画像。

国語研が所蔵している『悉曇藏』巻一（安然 著、1297年写）を調査したときに作成した文献ノート。調査した日付・場所、文献の名称、表紙に書かれている情報、大きさ、紙質などを原稿用紙に記録していきます。右は、国語研のウェブサイトで公開しているこの文献のデジタル画像。



資料調査の主な携行品（朝日祥之准教授の場合）



オリジナルのスライド写真デジタル化装置。スライド写真（ポジフィルム）をレンズの前に置き、その後ろから白い光を当てて撮影します。大量のスライド写真を、世界中どこでも短期間でデジタル化することができます。

ノートと筆記用具。インタビューや聞き取りを行う際に、メモを取ります。話者の方に地図などを書いてもらうこともあります。

はけ。資料をきれいにするところから始めます。

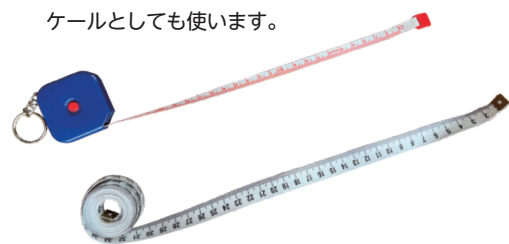


カメラ。資料を撮影するときは、印刷物や展示パネルにも使えるように、高解像度で撮ります。



布手袋。資料を汚してしまったり傷めてしまう恐れがあるので、布手袋を着けます。紙がもろくなっていることも少なくないので、資料は慎重に扱います。

巻き尺。資料の大きさを測ります。写真を撮影する際、資料の大きさが分かるようにスケールとしても使います。

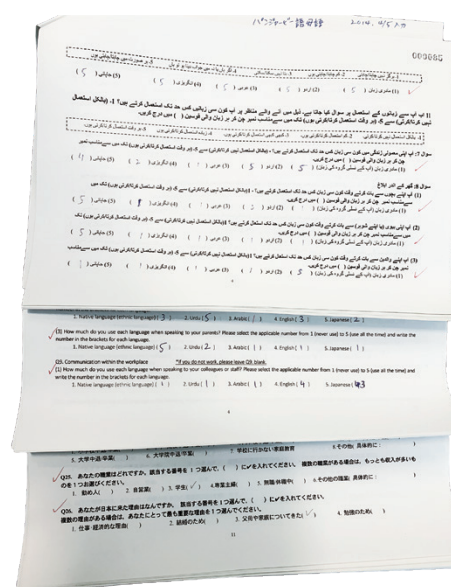


文字で集める



国語研は、日本各地でことばの使われ方を調べています。言語調査に用いるのが調査票です。調査協力者の回答が文字や記号で書き込まれた大量の調査票を集計し、分析します。

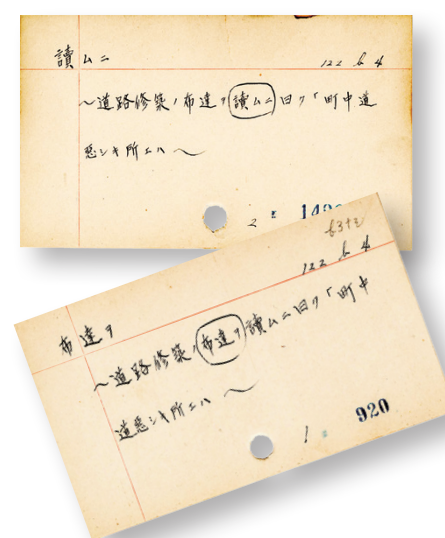
書きことばの研究では、文字を集めて分析します。話しことばの研究でも、多くの場合、録音や録画をするときに文字でも記録したり、後で文字に書き起こしたりします。音声は情報量が多いものの、一覧で把握するには向いていないため、文字での記録も欠かせません。



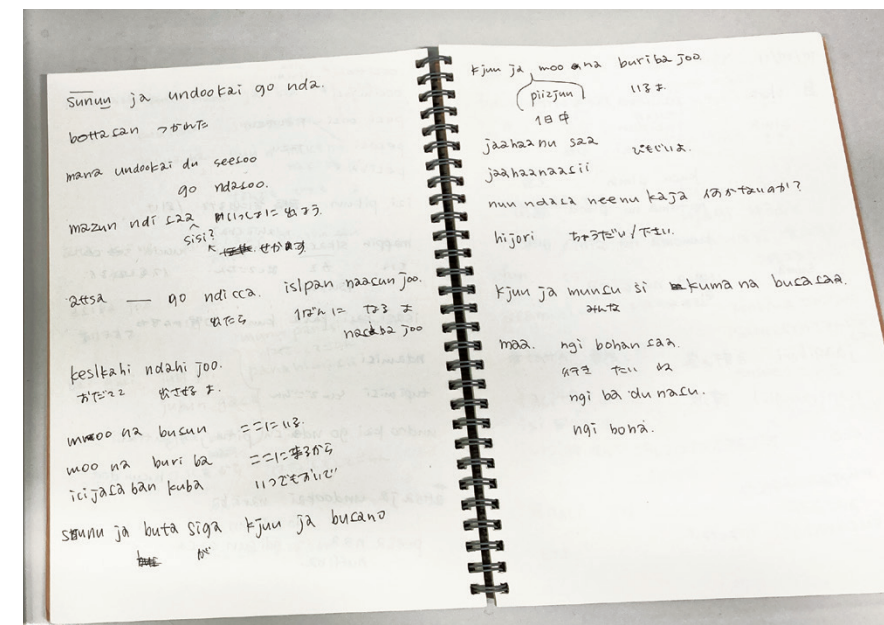
日本語を母語としない人を対象とした言語調査も行っています。上の写真は、日本に住むバキスタン人とその家族（日本人を含む）を対象として、言語選択や言語学習を調べる研究で使用した調査票です。ウルドゥー語版、英語版、日本語版を用意し、調査協力者に選んで記入してもらいました。余白に文字が書き込まれていることもあり、それも分析に加えます。



調査協力者に会うときは、できるだけその人たちの言語で話すようにしています。海外旅行者向けの会話集が役立ちます。

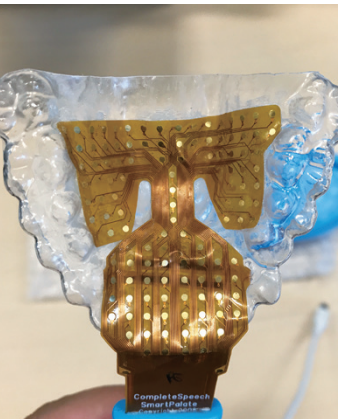


国語研では、雑誌や新聞などを対象に、ことばの使われ方や頻度を調べる語彙調査を行っています。以前は、調査すべき箇所を抜き出してカードに印刷しておき、抽出すべきことばに丸を付けて集計していました。1950年代は手書きによるガリ版印刷（左）で、後にタイプライターによる謄写印刷、原文のコピー、と変化してきました。現在はカードを作成せずにコンピュータを利用していますが、対象からことばを抽出して集計するという基本的な方法は変わっていません。

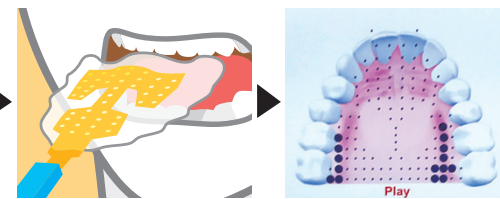


琉球方言の調査で使用しているフィールドノート。方言の発音は一度では聞き取るのが困難なため録音や録画をさせていただきますが、フィールドノートにも記録します。方言の発音は日本語のひらがな・カタカナでは表現し切れないため、国際音声記号を使います。パソコンやタブレットでメモを取る研究者もいますが、国際音声記号が素早く入力できない、キーボードの打音が録音に入ってしまうといった理由から、ノートへの手書きを選ぶ研究者も少なくありません。ノートの場合、何を書いているのか話者からも見やすいため、安心して話していただけるという効果もあるようです。

実験で集める

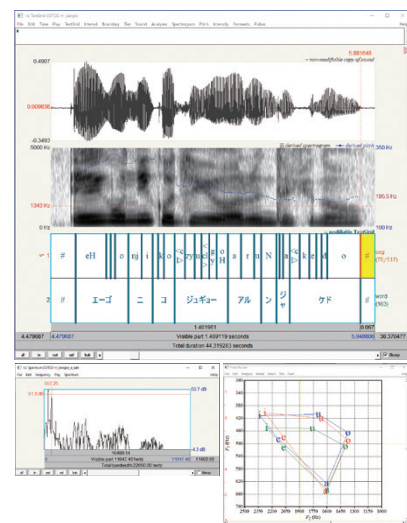
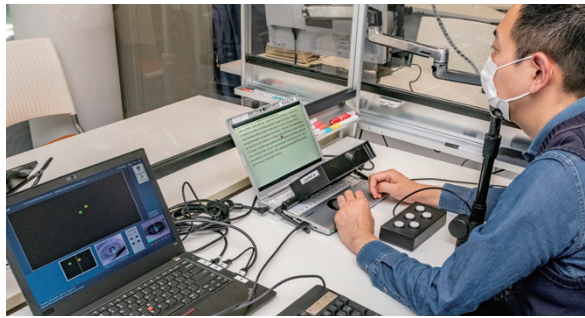


動的パレートグラム用の人工口蓋。パレートグラムとは、舌と口蓋（口腔の上壁）との接触を示す図のことをいいます。人工口蓋にはセンサーが設置されていて、これをくわえてことばを発音すると、どの音を発音しているときに舌が口蓋のどこに触れているかが分かります（右下）。

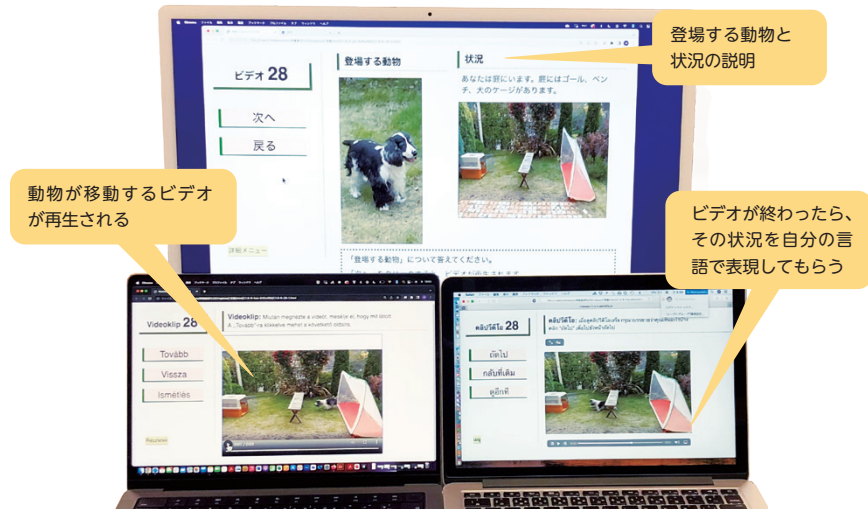


リアルタイム MRI 動画。リアルタイム MRI 動画は、医療用 MRI 装置を利用した撮像技術で、唇・舌・口蓋・喉頭など音声器官全体の運動を鮮明に撮影することができます。これは「キリン」の「ン」の調音位置で、舌を硬口蓋（口腔の上壁のうち歯茎の後ろの硬い部分）に接触させて軟口蓋（硬口蓋の後ろ）を下げて呼吸を鼻へも通すことによって生じる硬口蓋鼻音であることが分かります。

アイトラッキング（視線走査）装置。画面に表示された文を読むときの視線の位置と停留時間を計測します。どの部分を読むのに時間がかかっているのかを調べることで、文の処理機構の解明や、読みやすい文の提案につなげようとしています。



音声分析の例。録音された音声を音響分析ソフトを用いて子音区間・母音区間などに分割し、基本周波数やスペクトル、継続時間、強度などさまざまな音響特徴量を抽出することで、発音の特徴を明らかにできます。

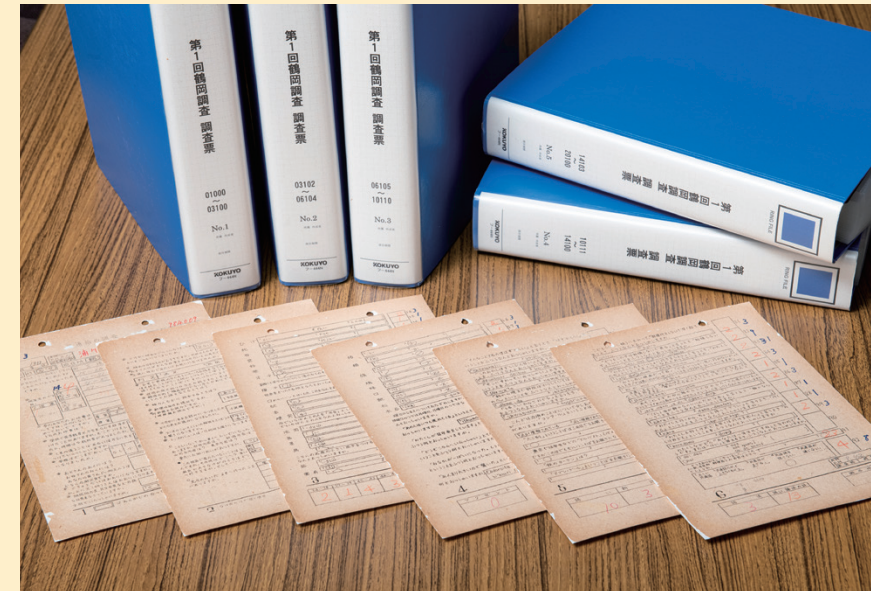


対照言語学のビデオ発話実験の1シーン。ある言語をほかの言語と比較して類似点や相違点を分析することで、それらの言語に関する理解を深めようというのが、対照言語学です。短いビデオ映像を示し、その状況を実験協力者に自分の言語で表現してもらいます。同じ場面を表す言語表現を、ほかの言語と比較することができます。写真は、日本語、ハンガリー語、タイ語バージョンを表示して並べたもの。

集めたことばを**保存する**

これまで国語研が集めたり作成したりしてきた、ことばに関する資料や文献は、どれもとても貴重なものです。それらは、国語研の貴重書庫や研究資料室、メディア保管庫などに、大切に保存しています。

しかし、紙は劣化します。音声・映像資料は読み取れなくなる可能性があります。過去の資料を状態よく保存することに加え、デジタル化して公開するなど、貴重な資料を活用できるようにする取り組みも行っています。



1950年に山形県鶴岡市で実施した共通語化に関する第1回調査で回収された調査票。劣化しているため1枚ずつ裏紙を貼って保存しています。鶴岡市での調査はこれまで4回実施しており、全ての調査票の原本を保存するとともに、スキャンしたデータも保存しています。また、回答データを収録したデータベースとその解説を国語研のウェブサイトで公開しています。



メディア保管庫には、オープンリールテープ2,833点、カセットテープ17,607点、ミニディスク1,333点、デジタルオーディオテープ23,522点、VHSテープ647点などの音声・映像資料が保管してあります。



オープンリールテープ（上）と録音された音声をデジタル化する装置（下）。オープンリールテープは8チャンネルあり、この装置を用いると8つのチャンネルを別ファイルとして読み込んで変換できます。

カセットテープ（上）と録音された音声をデジタル化する装置（下）。2倍速で、しかもA面とB面の音声を一度に読み込んで変換することができます。そのため、録音されている実時間の4倍のスピードで変換が可能です。大量のカセットテープがあるので、スピードは重要です。



国立国語研究所では、日本語・言語研究のために集めた基礎資料やデータを整備し、広く社会に提供しています。その多くが申請なしで国語研のホームページから利用できます。まずは「データ・資料を探す」の検索パネルで、気になる資料の種類や研究分野、キーワードを入力してみませんか。そこは豊かなことばの世界の入り口です。

日本語の追っかけのすすめ 「いかつい」に注目して

ながさわ



辞書ファン。「四次元ことばブログ」(<https://fngsw.hatenablog.com/>)にて辞書やことばについての知見を発信中。著書に『使える！国語辞書：日本語教師読本4』(webjapanese)、『比べて楽しい 国語辞書 ディープな読み方』(河出書房新社)。

公園を散歩していると、3歳くらいの男の子が、石垣をロッククライミングのようにはい上ろうとしていました。近所の少年たちがひょいひょいと駆け上がるのを見て、まねしたくなったのかもしれない。そばで見守っていた母親が、独り言のように声を掛けます。

「そこ登るの？ いかついね」

おお、「いかつい」をそう使うのか！

私の知っている「いかつい」は、「いかつい手」「いかつい男」のように、柔らかみがなくていかにも強そう、怖そうといった感じをいう語です。説明の仕方に差こそあれ、辞書も大体そんなようなことを書いています（記号などは一部省略）。

いかつ・い【厳つい】〔形〕角ばった顔つきであったりがっしりした体型であったりして、接する人に威圧感を与える様子だ。「一肩／一顔」（『新明解国語辞典 第八版』）

いかつーい【厳つい】〔形〕ごつごつしていかめしい。やわらかみがなく、強そうだ。「一肩」（『岩波 国語辞典 第八版』）

石垣を登ろうとする様子の形容としては、これらの語釈はうまく当てはまらず、ここでは単純に「すごい」というような意味で言っているように感じました。典型的な用法から外れているのは確かでしょう。

辞書が既存の意味・用法を見落としているのも珍しいことではありませんので、コーパスでも確

認してみます。「いかつい」を「すごい」の意で用いている例があるかどうか、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」(BCCWJ)や「日本語日常会話コーパス」(CEJC)ほか、国立国語研究所のコーパス検索アプリケーション「中納言」で検索できる範囲で探してみましたが、ちょっと見当たりそうにありません。これはひょっとすると、「いかつい」に新しい意味が発生しているのかもしれない。

私は年来、「日本語の追っかけ」をしています。アーティストが新曲を発表するのを今か今かと待ち構えるファンのごとく、時々刻々と生まれる新語や新用法をキャッチするのが楽しくて仕方なくて、雑誌や新聞を隅々まで読むのはもちろん、失礼を承知で人様の会話にまで耳をそばだてているのです。

新語がアーティストの新曲と大きく違うのは、自ら「私は新語です」とアピールしてはくれないということです。新語はいつの間にか世に現れ、最近こんなことばがあるらしいと注目され始めたころには、もう相当程度世間に流通している場合がほとんどです。日本語の運営が今月の新規実装語のリリースを出したりしてくれない以上、ユーザー側で目を光らせるほかありません。

私は、日々の中で見聞きしたことばで少しでもオヤツと思ったものがあれば、必ず用例カードに書き留めることにしています。カードといっても実際に用紙があるわけではなく、クラウド上の表計算ソフトに記録しているだけなのですが、個々の用例のデータのことをかっこつけて「用例カード」と呼んでいます。辞書づくりのために 145 万



もの用例を採集し、一枚一枚カードに記録していた見坊豪紀に憧れてのことです。

表計算ソフトを検索すると、冒頭の例と同じく単に「すごい」というような意味で使われていると思われる「いかつい」のカードが2枚ありました。記録したことをすっかり忘れているのだから、われながら不思議なものです。見坊豪紀は「迷ったときは、採集する」という方針を打ち出していました。私もこれに倣い、あまり深く考えることなく無節操に用例集めをしているので、個々の用例はあまり覚えていないのです。でもまあ、こうして気になったときにすぐに調べられるようにしておくことが大事です。

例の一つは、お笑い芸人・おいでやす小田さんのテレビ番組での発言でした。撥水スプレーでコーティングされたスーツを身にまとった小田さんは墨汁プールに落とされますが（なんちゅう番組じゃ）、コーティングのおかげでスーツは全く汚れません。スプレーの効果を体感した小田さんは、「これ、いかつ！」と驚きの声を上げます（日本テレビ「うわっ！ ダマされた大賞2022」2022年12月11日放送）。明らかに「すごい」の意味で使っています。

もう一つは、大人気のYouTube チャンネル「QuizKnock」の動画で採集した例です。算数オリンピックの問題に挑戦したメンバーの須貝駿貴さんは、その問題は13の倍数に注目するのがポイントで、170は13×13（169）と1に分けて考えるとよいという解説を聞いて驚き、こう言います。「170が169+1って言った？ 今。いかつ！ やばすぎるだろそれ！ 天才の分け方じゃん！」

（QuizKnock「東大 vs 算数オリンピック！ てか本来は小学生が解くんか…」2021年12月15日公開 <https://www.youtube.com/watch?v=17EJ6zowfgs>）

この「いかつい」の語義の変化は、「えぐい」にも似ています。もともと「あくが強く、のどがいらいらと刺激されるような感じや味がするようす」（『三省堂 現代新国語辞典 第六版』）の意だった「えぐい」は、近年は「強い個性があつてすごい」（同前）という褒めことばとしても使われます。「やばい」もそうですが、マイナスの意味の形容詞は単なる「すごい」という意味に拡張していく性質があるのでしょうか。

そもそも、「いかつい」と同源の「いかい」も、すでに似たような変化をたどっていました。『日本国語大辞典』の「語誌」欄から一部を抜粋します。

中古では「荒々しい・厳しい」などの意で用いられていたが、室町時代頃からは「程度が大きい」意で用いられるようになる。（『日本国語大辞典 第二版』）

「いかつい」に「すごい」の意が生まれるのは必然だったのではないかとさえ思えてきます。発祥はいつごろなのか、地域性はあるのかなど、まだまだ検証してみたいことがあります。当面はこの新「いかつい」の動向を追う必要があるでしょう。

そうこうしている間にも、なじみの薄いことばが次々と目や耳に飛び込んできています。日本語は供給が多くて、まだまだ飽きさせてくれそうにありません。



書籍紹介 ①

(2022年1～6月発行)

言語コミュニケーションの多様性

窪菌晴夫、朝日祥之〈編〉

くろしお出版

2022年3月



本書は2020年10月に開催されたNINJALシンポジウム「言語コミュニケーションの多様性」における基調講演とワークショップ（「配慮の表現・行動から見るコミュニケーションの諸相」「コミュニケーションの諸相」）の成果をまとめたものです。国語研が構築してきた各種コーパス、在外資料などの言語資源を活用した考察から、日本語学習者や障害のある人、さらには外国語との比較などに視点を広げた考察まで、言語とコミュニケーションに関わる幅広いテーマが扱われています。

▶ 朝日祥之

フレーム意味論の貢献 動詞とその周辺

松本 曜、小原京子〈編〉

開拓社

2022年3月



アメリカの言語学者チャールズ・J. フィルモアが1970年代に提案した「フレーム」という概念は、ほぼ半世紀を経て、意味論においてその重要性がますます注目されています。フレームとは、言語表現の背後にあるさまざまな世界知識を指します。本書には、多義性・反義性といった意味論の基本的問題、またイディオムや構文の意味、さらには語構造の意味に関わる諸問題に、フレームの概念がどのような解決を与えるのか、14人の気鋭の学者が取り組んだ研究成果がまとめられています。

▶ 松本 曜

日本語の格表現

木部暢子、竹内史郎、下地理則〈編〉

くろしお出版

2022年3月



本書は、日本語の格標示に関する諸問題を、古典語、方言、通言語的な観点から多角的に考察した論文集です。昨今、日本語の格標示に関する研究は、これまでの標準語中心の議論を乗り越え、方言間変異、日本語史、情報構造などの隣接諸分野の知見を取り込みながら発展しつつあります。本書はこの最新の研究動向を反映し、多様な執筆陣が、その理論的立場や学派を超えて、古典語・方言・通言語的視点という3つをバランスよく踏まえ、日本語の格の問題を扱っています。

▶ 下地理則（九州大学）



三省堂国語辞典 第八版

見坊豪紀、市川 孝、飛田良文、山崎 誠、飯間浩明、塩田雄大〈編〉

三省堂

2022年1月



プロソディー研究の新展開

窪菌晴夫、守本真帆〈編〉

開拓社

2022年2月



シリーズ〈日本語の語彙〉6
近代の語彙 2

—日本語の規範ができる時代—
飛田良文〈編〉

朝倉書店 2022年3月



地域文化の可能性

木部暢子〈編〉

勉誠出版

2022年3月



南琉球宮古語 池間方言辞典

仲間博之、田窪行則、岩崎勝一、五十嵐陽介、中川奈津子〈編著〉

国立国語研究所

2022年3月



みんなふつ語彙集：水納島方言

セリック・ケナン、大浦辰夫〈著〉

国立国語研究所

2022年3月

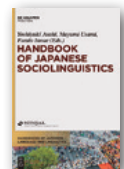


日本の消滅危機言語・
方言の文法記述

セリック・ケナン、木部暢子、五十嵐陽介、青井隼人、大島一〈編〉

国立国語研究所

2022年3月



Handbook of Japanese
Sociolinguistics

Yoshiyuki Asahi, Mayumi

Usami and Fumio Inoue〈Eds.〉

De Gruyter Mouton

2022年4月



ディラプディ

與那覇悦子〈作話〉 山本 史〈絵〉 山田真寛〈ことばの解説〉

ひつじ書房

2022年5月



Prosody and Prosodic
Interfaces

Haruo Kubozono, Junko Ito

and Armin Mester 〈Eds.〉

Oxford University Press

2022年5月



外界と対峙する

伝 康晴、前川喜久雄、坂井田瑠衣〈監修〉 牧野遼作、砂川千穂、徳永弘子〈編〉

ひつじ書房

2022年6月



書籍紹介 ②

(2022年7～12月発行)

人文学のためのテキストデータ構築入門

TEIガイドラインに準拠した

取り組みにむけて

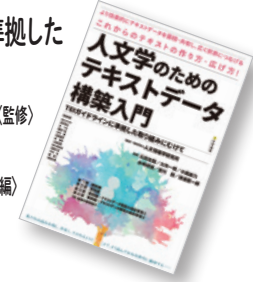
一般財団法人人情報学研究所〈監修〉

石田友梨、大向一輝、小風綾乃、

永崎研室、宮川 創、渡邊要一郎〈編〉

文学通信

2022年7月



本書は、文学・言語学・歴史学などの人文学において、テキストデータを効率的に管理・分析するための基礎知識を提供する入門書です。TEI (Text Encoding Initiative) ガイドラインに準拠したテキストデータ構築の方法を紹介し、実際のプロジェクトに取り組むための具体的な手順を解説しています。第1部は人文学のためのテキストデータ構築全般への導入編です。第2部は実践編で、手書き文字認識ソフトによるテキストデータの作成とTEIガイドラインでのテキストデータの構造化について解説しています。第3部と第4部は事例編で、TEIによってテキストを構造化し分析したさまざまな例を掲載しています。このように、本書はテキストデータの利用を考えている人文学の研究者にとって役立つ入門書となっています。

▶ 宮川 創

コーパスによる日本語史研究 中古・中世編

青木博史、岡崎友子、

小木曾智信〈編〉

ひつじ書房

2022年10月



「日本語歴史コーパス」の最初のバージョンが公開されて約10年になります。ほぼ毎年、各時代の資料が追加されるにつれて、このコーパスは日本語の歴史研究の分野に欠かせないものになってきました。本書は、このコーパスの構築・活用を行ってきた国語研「通時コーパス」プロジェクトの中古・中世（平安時代から室町時代まで）を担当したグループが行った研究をまとめたものです。コーパスを用いる日本語史研究全体を視野に入れた展望論文2編のほか、歴史コーパスの活用例としても読むことのできる研究論文7編、そして中古・中世のコーパスの解説6編から成ります。最新の研究論文集として価値があるだけでなく、先に刊行された『近代編』、今後刊行される『近世編』と共に、コーパスを使った日本語史研究に取り組もうとする人にとっての良きガイドとなるに違いありません。

▶ 小木曾智信

地域での日本語活動を考える 多文化社会

葛飾からの発信

野山広、福島育子、帆足哲哉、

山田泉、横山文夫〈編〉

ココ出版

2022年10月



本書は、東京都葛飾区において多様な背景の人々が共生する社会の実現を目指し、地域の日本語教室がいかに設立され、日本語支援の諸活動が住民主体でどのように実施・展開され、その試行錯誤の過程を経て何が見えてきたのかについて記述しています。第1部では「外国籍住民に対する地域での学習支援の実践」について葛飾区での取り組みを、第2部では「外国籍児童生徒に対する教室での学習支援の実践」について各地の事例をそれぞれ紹介し、第3部では「NPO法人による子どもサポート」に焦点を当てています。このように地域住民と行政の連携・協働の重要性に言及しつつ、第4部には連携・協働、諸活動を支える考え方を示す論者を収録しています。本書が、多文化社会の実現を目指す地域社会において草の根の住民活動が果たす意義や課題を探究、確認する一助となれば幸いです。

▶ 野山 広

The Theory and Practice of Language Faculty Science

Hajime Hoji, Daniel Plesniak
and Yukinori Takubo 〈Eds.〉

De Gruyter Mouton

2022年11月



本書は、言語能力を精密科学として研究する方法を具体的に示したものです。人間は一定の年齢(3～5歳)になると「人間の言語」を話すようになります。この能力は人間にしかないもので、しかも、人間の言語は離散無限と階層構造を持ち、その階層構造に基づいた規則を有しています。これは、鳥などの「言語」にはない、人間の言語だけが持つ性質と考えられています。しかし、この離散無限と階層構造（およびそれに基づく規則）は、単に前提として使われており、実験を通して科学的に示されたことはないと言えます。本書では、どのようにすれば、それを精密科学的な「仮説と再現可能な実験」で示すことができるか、ステップを踏んで示しています。志を持った若い研究者が本書を通じてこの分野に入ってもらえることを切に望みます。

▶ 田窪行則

Quantitative Approaches to Universality and Individuality in Language

Makoto Yamazaki, Haruko Sanada,
Reinhard Köhler, Sheila Embleton,
Relja Vulanović and Eric S.
Wheeler 〈Eds.〉

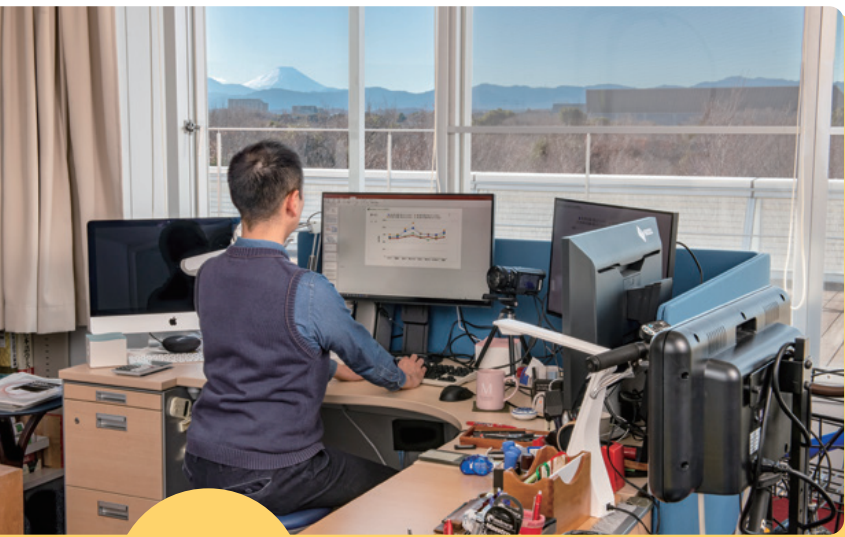
De Gruyter Mouton

2022年11月



本書は、2021年9月にNINJAL国際シンポジウムとして開催されたQUALICO 2021（第11回国際計量言語学会大会）での発表の中から選ばれた16本の論文を掲載した論文集で、執筆者は13か国、34名にわたります。本書で扱われている研究分野は、音韻、語彙、文法、文体、著者推定、自動分類など言語研究から言語処理研究まで幅広い内容をカバーしています。対象となっている言語は、チェコ語、中国語、イタリア語、日本語、ポーランド語など、12を数えます。計量的な手法が分野や言語を問わず普及していることがうかがえます。本書には、Zipfの法則に代表される既存の言語法則に関する検証などの論考のほか、新たな法則を見いだそうとする試みなど、さまざまな研究が収録されています。

▶ 山崎 誠



研究室訪問

撮影は今です！

浅原正幸 国立国語研究所 研究系 教授

国語研の研究者の研究室——皆さんは、どのような部屋を思い浮かべますか？ 壁は本棚で埋まり、机の上には本が積み重なっている……という想像をした人が多いかもしれません。ところが、浅原正幸教授は「私の研究室には本棚と言えるものはないんですよ」と笑います。確かに、机の横に小さなキャビネットがあり、そこに少しの本が並んでいるのみ。「どれも頂いた本です。自分ではほとんど本を買わないので」。その理由は後ほど。

浅原教授は、2012年から国語研でコーパスの構築に携わってきました。「アノテーションといって、ことばに品詞や係り受けなどさまざまな情報を付けていきます。アノテーションをしていく中で、早くできる文と時間がかかる文があることに気付いたのです。その差は何によって生まれているのかを知りたいと思い、文を読むのにかかる時間、“読み時間”を計測して分析しています」

アイトラッキング（視線走査）装置を使い、画面に表示された文を読むときの視線の位置と時間を計測します。「助

▼いつも見ているという
巨大な時計



動詞の『た』は過去の意味と完了の意味があります。文字としては同じ『た』ですが、過去の意味で使われている『た』の方が完了の意味で使われている『た』よりも、読み時間が長くなることが分かりました」と浅原教授。脳の活動の測定から過去の情報の認識には時間がかかることが報告されており、今後、ほかの分野の研究者となぜそうなるのかについて考えていきたいと語ります。知っている情報より知らない情報の方が読むのに時間がかかることも分かっています。「読み時間のデータを集めて分析していくことで、情報をどういう順番で書くと、読みやすく、相手に伝わりやすいかを評価できるようになると考えています」

なぜ読み時間に注目したのでしょうか。「比較的簡単に計測できるというのがありますが、もともと時間に興味があるのです」と浅原教授。「いつも時計を見て、あと何分でこれをやらないといけない、と考えながら仕事をしています」。研究室には、スポーツ競技場にあるような大きなデジタル時計が置いてあります。

懸垂マシンなどのトレーニング器具もあります。「体力維持のためです。コーパスの構築には5年、6年とかかります。持久戦なので体力をつけるためにトレーニングをしています。椅子はひじ掛けや背もたれのない椅子を使い、背筋を伸ばすように意識しています」

さて、なぜ浅原教授の研究室には本が少ないのでしょうか。「国立国会図書館の非常勤調査員を務めていたことがあり、その電子書庫を見たときに思ったのです。日本で刊行された本は、全てここに集まる。ならば本の収集や保存は図書館に任せ、自分は図書館を利用しよう、と」

休日に図書館や書店に行くことも多いそうです。「妻と娘が本を読んだり選んだりしている一方で、私は書架の間をずっと歩き回っています。本がどのように分類され整理されているのかにも興味があるのです。実は、興味が高じて司書の資格を取得しています。私は、ものの分類や整理が得意な方だと思いますよ。アノテーションも、ことばを分類して整理していく作業です」

研究室からは富士山がよく見えます。浅原教授が時計を見て一言。「富士山がとてもきれいですよね。あと10分すると太陽が窓の正面に来てしまうので、撮影は今です！」

ことばの波止場 Vol.12

2023年3月31日発行

編集後記

第4期中期計画の開始に合わせ、『ことばの波止場』を刷新しました。ウェブで年2回配信し、その2回を冊子版にまとめています。ことばについて科学的に考えることの面白さや重要性をお届けしてまいります。私の印象的な「ことばを知った体験」の一つは、大学生の時に「僭越ながら」を使う人に初めて接し、その表現を知ったことです。また、「いかつい」の新用法が気になり、私も用例を探してみました。野球選手が放ったパワフルなファールに向けて「いかつい」とツイートする例を見つけました。（柏野和佳子）

編集 国立国語研究所広報室ことばの波止場編集部会
（柏野和佳子（部会長）、朝日祥之、五十嵐陽介、井上文子、岩崎拓也、中川奈津子、福永由佳、松本 曜）

発行 大学共同利用機関法人 人間文化研究機構 国立国語研究所
〒190-8561 東京都立川市緑町10-2
Tel 0570-08-8595
<https://www.ninjal.ac.jp/>

編集協力 フォトンクリエイト（鈴木志乃）
撮影 Studio CAC（吉田 号）
デザイン デザインコンビビア（山田純一）



「ことばの波止場」はウェブサイト「ことば研究館」でもご覧になれます。

©2023 National Institute for Japanese Language and Linguistics